

風 士

人 間 學 的 考 察



和 辻 哲 郎 著



1940

昭和十年九月二十五日 刷
昭和十年九月三十日 第一刷發行
昭和十五年十二月二十日 第九刷發行

風 土
定價貳圓五拾錢

著 者
和辻 哲郎

發行者
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩 波 茂 雄

印刷者
東京市神田區錦町三丁目十一番地
白 井 赫 太 郎

發行所
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩 波 書 店

電話九段(33)一八七・一八八番
振替口座東京二六二四〇〇番

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・蟲丁等）がありました節は、御手數乍ら洩れなく
御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても早速お取替致します。

本製島寺 刷印社興精

序　　言

この書の目ざすところは人間存在の構造契機としての風土性を明かにすることである。だからこゝでは自然環境が如何に人間生活を規定するかといふことが問題なのではない。通例自然環境と考へられてゐるものは、人間の風土性を具體的地盤として、そこから對象的に解放され來つたものである。かゝるものと人間生活との關係を考へるといふ時には、人間生活そのものも既に對象化せられてゐる。従つてそれは對象と對象との間の關係を考察する立場であつて、主體的な人間存在にかゝはる立場ではない。我々の問題は後者に存する。たとひこゝで風土的形象が絶えず問題とせられてゐるとしても、それは主體的な人間存在の表現としてであつて、所謂自然環境としてではない。この點の混同は豫め拒んで置きたいと思ふ。

自分が風土性の問題を考へはじめたのは、一九二七年の初夏、伯林に於てハイ

デッガーの『有と時間』を讀んだ時である。人の存在の構造を時間性として把握する試みは、自分にとつて非常に興味深いものであつた。然し時間性がかく主體的存在構造として活かされたときに、何故同時に空間性が同じく根源的な存在構造として、活かされて來ないのか、それが自分には問題であつた。勿論ハイデッガーに於ても空間性が全然顔を出さないのではない。人の存在に於ける具體的な空間への注視からして、獨逸浪漫派の『生ける自然』が新しく蘇生させられるかに見えてゐる。然しそれは時間性の強い照明のなかで殆んど影を失ひ去つた。そこに自分はハイデッガーの仕事の限界を見たのである。空間性に即せざる時間性は未だ眞に時間性ではない。ハイデッガーがそこに留まつたのは彼の Dasein があくまでも個人に過ぎなかつたからである。彼は人間存在をただ人の存在として捕へた。それは人間存在の個人的、社會的な二重構造から見れば、單に抽象的な一面に過ぎぬ。そこで人間存在がその具體的な二重性に於て把握せられるとき、時間性は空間性と相即し來るのである。ハイデッガーに於て充分具體的に現はれて來ない歴史性も、かくして初めてその真相を呈

露する。と共に、その歴史性が風土性と相即せるものであることも明かとなるのである。

このやうな問題が自分に現はれて來たのは、時間性の綿密な分析に首を突込んだ自分が丁度さまざまの風土の印象に心を充たされてゐたためであつたかも知れぬ。がまた丁度かゝる問題が自分に現はれて來たために風土の印象を反芻し或は風土の印象に對して注視を向けるといふことにもなつたのである。だから自分にとつて風土の問題を自覺せしめたものは時間性歴史性の問題である。と云つてよい。これらの問題に媒介せられることなしには、風土の印象は單に風土の印象として留まつたであらう。が右の如き媒介によつたといふことは、丁度風土性と歴史性との相即を示してゐるのである。

この書は大體に於て昭和三年九月より四年二月に至る講義の草案を基礎としてゐる。この講義は、外遊より歸つて間のない時、人間存在の時間性空間性の問題を立ち入つて考究する餘裕もなく、たゞ風土の問題のみを取り上げて論じて見たのである。がこの書の大部分は、右の草案のそれぞれの個所をその後折

にふれて書きなほし、斷片的に發表したものである。草案の形をそのまゝ保存してゐるのは最後の一章のみに過ぎない。がもともと一つの聯關に於て考へられたものであるから、未だ甚だ不備ではあるが、こゝに一先づ纏めて置くことにする。大方の識者の是正を得ば幸である。

昭和十年八月

著　　者

内 容 目 次

第一章	風土の基礎理論	一
-----	---------	---

(一)	風土の現象	一
(二)	人間存在の風土的規定	一四

第二章	三つの類型	三
-----	-------	---

(一)	モンスーン	三
(二)	沙漠	六
(三)	牧場	六

第三章	モンスーンの風土の特殊形態	一九
-----	---------------	----

(一)	支那	一九
-----	----	----

(二) 日 本	二二三
---------	-----

(イ) 颱風的性格	二二三
-----------	-----

(ロ) 日本の珍らしさ	二六〇
-------------	-----

第四章 藝術の風土的性格	二八三
--------------	-----

第五章 風土學の歴史的考察	三四五
---------------	-----

(一) ヘルデルに至るまでの風土學	三四五
-------------------	-----

(二) ヘルデルの精神風土學	三五三
----------------	-----

(三) ヘーゲルの風土哲學	三七八
---------------	-----

(四) ヘーゲル以後の風土學	三九四
----------------	-----

第一章 風土の基礎理論

(一) 風土の現象

こゝに風土と呼ぶのは或土地の氣候氣象地質地味地形景觀などの總稱である。それは古くは水土とも云はれてゐる。人間の環境としての自然を地水火風として把握した古代の自然觀がこれらの概念の背後にひそんでゐるのであらう。しかしそれを『自然』として問題とせず『風土』として考察しようとすることには相當の理由がある。それを明かにするために我々は先づ風土の現象を明かにして置かなくてはならぬ。

我々はすべていづれかの土地に住んでゐる。従つてその土地の自然環境が、我々の欲すると否とに拘らず、我々を『取り卷いて』ゐる。この事實は常識的に

は極めて確實である。そこで人は通例この自然環境をそれらの種類の自然現象として考察し、引いてはそれの『我々』に及ぼす影響をも問題とする。或場合には生物學的生理學的な對象としての我々に、他の場合には國家を形成するといふ如き實踐的な活動をするものとしての我々に。それらは各専門的研究を必要とするほど複雑な關係を含んでゐる。しかし我々にとつて問題となるのは日常直接の事實としての風土が果してそのまゝ自然現象と見られてよいかといふことである。自然科学がそれらを自然現象として取扱ふことはそれぞれの立場に於て當然のことであるが、然し現象そのものが根源的に自然科学的對象であるか否かは別問題である。

我々はこの問題を考へて見るために常識的に明白な氣候の現象を、しかもその内の一契機に過ぎない寒さの現象を捕へて見よう。我々が寒さを感じる、といふ事は、何人にも明白な疑ひのない事實である。ところでその寒さとは何であらうか。一定の温度の空氣が、即ち物理的客觀としての寒氣が、我々の肉體に存する感覺機官を刺戟し、さうして心理的主觀としての我々がそれを一定の心

理狀態として經驗することなのであらうか。もしさうであるならば、その『寒氣』も『我々』もそれ／＼單獨に、それ自身に於て存立し、その寒氣が外から我々に迫り來ることによつて初めて『我々が寒さを感じ、』といふ志向的關係が生ずることになる。従つて寒氣の我々に對する影響なるものが當然考へられてよい。

が果してさうであらうか。我々は寒さを感じ、前に寒氣といふ如きものの獨立の有をいかにして知るのであらうか。それは不可能である。我々は寒さを感じることに於て、寒氣を見出すのである。しかもその寒氣が外にあつて我に迫り來ると考へるのは、志向的關係に就ての誤解に他ならない。元來志向的關係は外より客觀が迫り來ることによつて初めて生ずるのではない。個人的意識について考察せられる限り、主觀はそれ自身の内に志向的構造を持ち、主觀としてすでに『何ものかに向ける』ものである。『寒さを感じ、』といふその『感じ』は、寒氣に向つて關係を起す一つの『點』のではなく、『……を感じ、』これとしてそれ自身すでに關係であり、この關係に於て寒さが見出されるのである。

る。だからかゝる關係的構造としての志向性は、寒さにかゝる主觀の一つの構造に他ならぬ。『我々が寒さを感じる』といふことは先づ第一にはかゝる『志向的體驗』である。

しかしそれならば寒さは主觀の體驗の一契機に過ぎないではないか。そこに見出された寒氣は『我』の境内の寒氣である。然るに我々が寒氣と呼ぶものは、我の外にある超越的客觀であつて、單なる我の感じではない。主觀的體驗はいかにしてこの超越的客觀に關係し得るか。即ち寒さの感じといふ如きものがいかにして外氣の冷たさに關係し得るか。——この問は志向的關係に於て志向せられたものに就ての誤解を含んでゐる。志向對象は心理的内容といふ如きものではない。従つて客觀的な寒氣と獨立に有るところの體驗としての寒さが志向對象だといふわけではない。我々が寒さを感じる、とき、我々は寒さの『感覺』を感じるのではなく直接に『外氣の冷たさ』或は『寒氣』を感じるのである。即ち志向的體驗に於て『感ぜられたるもの』としての寒さは、『主觀的なもの』ではなくして『客觀的なもの』なのである。だから寒さを感じる、といふ

志向的な『かゝはり』そのものが、すでに外氣の寒冷にかゝはつてゐると云つてよい。超越的有としての寒氣といふ如きものは、この志向性に於て初めて成り立つ。従つて寒さの感じが外氣の寒冷と如何にして關係するかといふ如き問題は、本來存しないのである。

かく見れば主觀客觀の區別、従つてそれ自身單獨に存立する『我々』と『寒氣』との區別は一つの誤解である。寒さを感じる、とき、我々自身はすでに外氣の寒冷のもとに宿つてゐる。我々自身が寒さにかゝはるといふことは、我々自身が寒さの中へ出てゐるといふことに他ならぬのである。かゝる意味で我々自身の有り方は、ハイデッガーが力説するやうに、『外に出てゐる』(existieren)ことを、従つて志向性を特徴とする。

そこにかういふことになる。我々自身は、外に出、てゐるものとしておのれ自身に對してゐる。自己をふり返るといふ仕方でおのれ自身に向ふのではない時にも、即ち反省を待つまでもなく、自己は我々自身にあらはである。反省は自己把捉の一つの様態に過ぎない。しかもそれは自己開示の仕方として原初のも

のではない。(尤も Reflektieren をその視覚的な意味に、即ち何ものかに突當つてそこから反射すること、何ものかの方から反射に於ておのれを示すことの意味に解するならば、それは自己が我々自身に於てそれ自身あらはである仕方を云ひ現はしたものと見ることも出来るであらう。)我々は寒さを感じる。即ち我々は寒さのうちへ出てゐる。だから寒さを感じるといふことに於て我々は寒さ自身のうちに自己を見出すのである。然しこのことは、我々が己れを寒さのなかに移し入れ、その移し入れられたる己れをそこにあるものとしてあとから見出すのではない。寒さが初めて見出されるときに我々自身はすでに寒さのうちへ出てゐるのである。だから最も根源的に『外に在る』ものは、寒氣といふ如き『もの』『対象』ではなくして、我々自身である。『外に出る』のは我々自身の構造の根本的規定であつて、志向性も亦これに基いたものに他ならない。寒さを感じるの、は一つの志向的體驗であるが、そこに於て我々は、すでに外に、即ち寒さのうちへ出てゐる己れを見るのである。

以上は寒さを體驗する個人的意識の視點に於て考察せられたものであるが、

しかしそこで『我々、は寒さを感じる』と云ひ現はしても何ら支障がなかつたやうに、寒さを體驗するのは我々であつて單に我のみではない。我々は同じ寒さを共に感ずる。だからこそ我々は寒さを云ひ現はす言葉を日常の挨拶に用ゐるのである。我々の間に寒さの感じ方が各異なつてゐるといふことも、寒さを共に感ずるといふ地盤に於てのみ可能になる。この地盤を缺けば他我の中に寒さの體驗があるといふ認識は全然不可能であらう。さうして見れば、寒さの中に出てゐるのは單に我のみではなくして我々である。否、我々であるところの我、我であるところの我々である。『外に出る』ことを根本的規定としてゐるのはかゝる我々であつて單なる我ではない。従つて『外に出る』といふ構造も、寒氣といふ如き『もの』の中に出るよりも先に、すでに他の我の中に出るといふことに於て存してゐる。これは志向的關係ではなくして『間柄』である。だから寒さに於て己れを見出すのは、根源的には間柄としての我々なのである。寒さの現象が何であるかは以上に於てはゞ明かになつたと思ふ。しかし我は寒さといふ如き氣象的現象をたゞ一つ獨立に體驗するのではない。それ

は暖さや暑さとの聯關に於て、更に風、雨、雪、日光、等々との聯關に於て體驗せられる。即ち寒さは種々なる氣象的現象の系列全體としての『氣候』の中の一環に過ぎない。我々は寒風の中から暖かい室内に入つた時に、或は寒い冬のあとで柔かい春風に吹かれた時に、或は激暑の眞晝沛然とした夕立に逢つた時に、常にそれらの我々自身でない氣象に於て先づ我々自身を了解するのであり、從つて更に氣候の移り變りに於ても先づ我々自身の移り變りを了解するのである。がこの『氣候』も亦單獨に體驗せられるのではない。それは或土地の地味地形景觀などとの聯關に於てのみ體驗せられる。寒風は『山おろし』であり或は『から風』である。春風は花を散らす風であり或は波を撫でる風である。夏の暑さも亦旺盛な綠を萎えさせる暑さであり或は子供を海に嬉戲せしめる暑さである。我々は花を散らす風に於て歡び或は傷むところの我々自身を見出す如く、ひでりの頃に樹木を直射する日光に於て心萎える我々自身を了解する。即ち我々は『風土』に於て我々自身を、間柄としての我々自身を見出すのである。

このやうな自己了解は、寒さ暑さを感じる『主觀』としての、或は花を歡ぶ主觀